期間　2018年10月4日(木)～10月31日(水)
会場　愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー
主催　愛知県立大学日本文化学部、
愛知県立大学長久手キャンパス図書館
共催　愛知県立芸術大学、古代文字資料館、
愛知県立大学文字文化財研究所

＜企画展示＞

「紙の道の文化史 ―正倉院からサマルカンドまで―」

4年前の2014年11月、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, UNESCO）は、「和紙：日本の手漉和紙技術」を無形文化遺産（Intangible Cultural Heritage）に登録することを決定しました。和紙＝日本の製紙技術が、比類ない価値をもつ伝統的な工芸技術として、世界に認められたのです。

中国で生まれ、日本に伝わった製紙技術は、「和紙」として現代に継承され、日本文化の創造を支えてきました。今年度の本学学術講演会・公開講座では、そうした製紙技術の伝播の歴史を辿り、和紙が生み出した文化―律令国家の公文書、王朝文学の装飾紙、屏風・掛け軸、写本と版本、文化財の修復まで―を廻ってみたいと思っています。

学術講演会・公開講座に関連して、「紙の道」と和紙の文化についての理解を助けるためのささやかな展示を企画しました。展示は以下のように構成されています。

プロローグ－正倉院からサマルカンドまで
Ⅰ　紙の発生と伝播
Ⅱ　日本古代の紙

Ⅲ　紙の芸術・文化
Ⅳ　紙と文学
エピローグ－日本の各地の和紙

東西の文化交流のなかで伝えられた製紙技術の歴史、美しくしなやかな和紙がもつ多彩な表情を知っていただけたらと願っています。

なお本展示は、愛知県立芸術大学のプロジェクト（学振研究拠点形成事業 B アジア・アフリカ学術基盤形成型「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ―サマルカンド紙の復興を中心に―」）との連携事業です。また、古代文字資料館からも全面的な協力をいただきました。ご協力くださった方々にこの場を借りて、お礼を申し上げます。

世界の紙の伝播の図

地図作成：柴崎幸次（愛知県立芸術大学）

プロローグ

正倉院からサマルカンドまで

正倉院からサマルカンドまで「紙の道」を紹介します。中国から西方への製紙技術の伝播は、751 年の「タラス河畔の戦」（唐とアッバース朝との戦闘）を契機とするとされます。捕虜となった唐の製紙職人がサマルカンドでその技術を伝え、イスラム文化圏では、パピルスや羊皮紙に代わって紙が浸透していくことになりました。

＜展示品解説＞

正倉院事務所編『正倉院の紙』

日本経済新聞社　1970年

正倉院は古代の紙の宝庫である。本書は、1960 年から 1962 年にかけて正倉院事務所によって行われた学術調査の成果報告書で、顕微鏡写真を含む多数の図版とともに、復元した標本紙を収めている。

なお正倉院事務所は、2005 年から 2008 年に紙の第二次調査を行っており、その成果は『正倉院紀要』32 号（2010 年）に掲載されている。（丸山）

復元されたサマルカンドペーパー

Koni-Ghil Meros工房

21世紀　個人蔵

〝サマルカンド紙〟は厳密な定義はないが、製紙の歴史の上では約 1200 年前（おそらく 750 年くらいに）に中国から製紙技術が伝播したサマルカンドの紙工房の伝統を引き継ぐ紙として知られている。おそらくこの紙がイスラム世界において成熟した、中央アジアから西アジアの紙の原点だと考えられている。

Koni-Ghil Meros 工房は、ユネスコと JICA によりサマルカンド紙の復活を目指し 2010 年に設立され、現在は桑を原料にサマルカンド紙を漉いている。（柴崎）

Ⅰ 紙の発生と伝播

紙は、後漢の蔡倫（さいりん）によって発明されたと言われてきましたが、現在では、蔡倫は紙の改良者であったと考えられています。蔡倫の改良した紙は、布などの繊維製品を加工して作ったものでした。ここでは、木簡、パピルス、亜麻布、シュロ葉、羊皮紙など、紙以外のさまざまな書写材料を紹介します。あわせて、紙が伝わった東西交流の軌跡を示す貨幣や碑文（拓本）を展示します。

＜展示品解説＞

「王杖十簡」木簡（複製）

原資料：後漢（1世紀） 甘粛省博物館蔵

中国甘粛省武威県の漢墓から出土した木簡。内容は、皇帝が下した敬老対策の法令と、墓の主が 70 歳になって皇帝から王杖を賜ったことを記す。形状は、長さ 23 ㎝（漢代の１尺）、幅１㎝の木簡 10 枚を麻布で閉じた冊書のかたちをとる。後に木簡や竹簡が紙に代わっても、冊子、冊数など「冊」の字が使われるのは、この木簡を綴じた象形による。（丸山）

エジプト象形文字の「死者の書」（パピルス断片）

古代文字資料館所蔵
エジプト／紀元前12世紀～紀元後2世紀頃

来世のための呪文が書かれた「死者の書」。エジプト象形文字の‘楷書’にあたる神聖文字（ヒエログリフ）で書かれている。（吉池）

エジプト神官文字の文書（亜麻布断片）

古代文字資料館所蔵
エジプト／紀元前4世紀以降

「死者の書」の文言をふくむ。エジプト象形文字の‘行書’にあたる神官文字（ヒエラティック）で書かれている。（吉池）

ブラーフミー文字の仏教経典（シュロ樹葉断片）

古代文字資料館所蔵
バーミヤン／紀元後2世紀～5世紀

ブラーフミー文字で書かれたインド語の仏教経典。両面に書かれている。『二万五千頌般若経』Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā Sūtra（漢訳は『摩訶般若波羅密経』鳩摩羅什訳）の一部。（吉池）

ギリシア文字の商業文書（パピルス断片）

古代文字資料館所蔵
エジプト／紀元後3世紀

ギリシア文字・ギリシア語の商業文書。両面に濃い茶色で書かれている。表には、土地の貸借に関わることが書かれている。裏の内容は破損がひどく不明。（吉池）

ラテン文字の法廷文書（ヴェラム）

古代文字資料館所蔵　イギリス／1429年

ヘンリー６世時代の手書き法廷文書。ヴェラムに黒いインクを用いて筆記体で書かれたラテン語文書。赤い封印が完全な状態で残っている。ヘンリー６世の統治７年目（1429 年）の日付がある。（吉池）

四体字銭（銅、鋳造）

古代文字資料館所蔵
中国／元朝・至元年間(1264-1294又は1335-1340)

モンゴル支配下の元朝の貨幣。表に漢字で「至元通寶」とある。裏では、漢語の至元通寶という語を４種の文字で音写する。
上：パスパ文字（至）、下：ウイグル文字（元）、右：アラビア文字（通）、左：西夏文字（寶）（吉池）

莫高窟（ばっこうくつ）の六字真言碑（拓本）

古代文字資料館所蔵

中国・敦煌／元朝・至正8年（1348）

六種の文字により真言「ああ蓮華の上の宝珠」（オンマニパドメイウン）が刻されている。中央の像の、最上の一行目がランチャ（ランツァ）文字、二行目がチベット文字。像の右端が漢字、次が西夏文字。像の左端がウイグル文字、次がパスパ文字。これ等の文字は、書写の方向によって、上と右と左の三グループにまとまっている。上の二種は横に左から右に読む。右の二種は縦に右から左に読む。左の二種は縦に左から右に読む。（吉池）

Ⅱ 日本古代の紙

『日本書紀』には、610 年に高句麗の曇徴（どんちょう）が紙・墨を造ったことが記されています。それ以前にも製紙技術は伝わっていたと思われますが、実際に紙が盛んに製造されるようになったのは７世紀以降です。とくに８世紀初めの律令国家の成立とともに、文書による行政システムが浸透し、日本の製紙技術は飛躍的に高まりました。ここでは、８世紀に紙と併用された木簡や、地方から提出された紙の文書、正倉院に残る典籍、百万塔陀羅尼などを紹介します。

＜展示品解説＞

「乙丑年」木簡（複製）

原資料：天智4年（665） 奈良文化財研究所蔵

石神遺跡（奈良県明日香村）出土の木簡。「乙丑年」は天智天皇４年（665）、「三野国（みのの）ム下評（くにむげのこおり）大山五十戸」は『和名類聚抄』の美濃国武芸郡大山郷（現在の岐阜県加茂郡富加町）を指す。国―評―五十戸という行政単位を示す最古の木簡で、米の荷札であったと考えられる。紙の使用は始まっていたが、荷札としては丈夫な木が使用された。（丸山）

百万塔と百万塔陀羅尼

宝亀元年（770） 個人蔵

百万塔は、称徳天皇の発願によって作られた木製の三重小塔で、塔内に最古の印刷物として名高い陀羅尼経を納める。天平宝字８年（764）におきた恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱の平定後、100 万基が作られ、大安寺や東大寺・法隆寺など 10 の大寺に分置された。現在は法隆寺に 45,000 基あまりが残り、各地の博物館や個人の所蔵も多い。日本では、百万塔陀羅尼以後、印刷は、近世になるまで普及しなかった。展示の陀羅尼経は近世の模造か。（丸山）

（左）相輪部底面 赤外線写真

古代の墨書「左」「長」（一字不明）が残る。「左」は工房の名、「長」は工人の名を示す

（右）基底部 赤外線写真

享保二年（1717）法隆寺から摂津の多田院への寄進に関連した墨書

杜家立成雑書要略（複製）

921年精芸出版合資会社コロタイプ複製

原資料：天平16年（744） 正倉院宝物

光明皇后筆。『杜家立成雑書要略』は、隋から唐にかけて杜氏（杜正玄・杜正蔵兄弟か）が作成した往復書簡文例集（書儀）である。料紙は美しく染められた色麻紙を継いで作られている。奥書の署名から、天平 16 年（744）、光明皇后 44 歳の時の書写と知られる。紙の普及とともに、書状のやり取りも盛んになり、こうした模範例文集が必要とされたものであろう。（丸山）

天平2年尾張国正税帳（複製）

原資料：天平2年（730） 正倉院宝物
『愛知県史 資料編6』附録

「正税帳」は、地方の国の年ごとの会計報告書。正倉院には天平年間の諸国の正税帳が 20 点以上残っている。尾張国は天平２年（730）と天平６年（734）の断簡が伝存する。地方の国々は、こうした会計報告だけでなく、戸籍・計帳などのさまざまな書類を作成し、中央に提出していた。そのために使用された紙は膨大な量に及んだ。（丸山）

Ⅲ 紙の芸術・文化

紙は、単に文字を記すだけではなく、美しく装飾され、華やかな王朝文化作品を生み出すことになります。平安時代には、『平家納経』をはじめ華麗に荘厳された写経や、和歌集、絵巻などが数多く作られました。ここでは、最近、県大の所蔵となった『病草紙（やまいのそうし）』の模本を紹介します。江戸時代のものですが、もとは 12 世紀に造られた作品です。

＜展示品解説＞

病乃草紙（やまいのそうし）（模本）

天保13年（1842） 愛知県立大学蔵

関戸家本『病草紙（やまいのそうし）』（国宝）の近世模本。全 17 場面を模写する。関戸家本『病草紙』は、12 世紀後半に後白河法皇の周辺で宮廷画師によって作成されたと考えられる絵巻。奥書があり、天保 13 年（1842）に、尾張藩の御用絵師長谷川宗一（長谷川雪堤）が所蔵していた模本を写したものであることがわかる。また、本奥書には、尾張の国学者・医師の大舘高門の旧蔵本を尾張藩医浅井正翼（紫山）が模写させたことが記されている。これらの奥書はこれまでに全く知られておらず、関戸家本の構成や系譜を知る上で重要な新史料となる。（丸山）

東家旧蔵『吉利支丹抄物（きりしたんしょうもつ）』（写本／レプリカ）

16世紀後半頃成立か

ルイス・デ・グラナダ（1504-1588）の著作から大きな影響を受けて成立した本書は、キリスト教の礼拝の方法や連禱（祈りの言葉）、信者の生活のあり方を記録したものであり、説教の場で用いられる手控えであったと言われている。全体を通して変体仮名で書かれているが、キリストや聖人の名など、特定の語にはいくつかアルファベットの合字も見られる。従来、作成者は不明とされてきたが、大塚英二氏により高山右近の手になる可能性が指摘されている。

現物は、大阪府茨木市の東家にて多数のキリシタン遺物とともに発見された。現在は失われており、大阪毎日新聞社によって作成されたレプリカのみが現存している。

大航海時代に宣教師たちによって日本にもたらされたキリスト教的世界観や当時の日本人のキリスト教受容の様相、ヨーロッパと日本との文化的共通性や異質性を伺うことができる重要な資料である。（久保薗）

『フランス学士院本 羅葡日対訳辞書』（影印）

原資料：1595年成立 フランス学士院図書館所蔵

岸本恵美解説、三橋健書誌解題、清文堂書店 2017年刊

本書は日本語とヨーロッパの言語の対訳辞書のうち、現存最古の辞書である。日本イエズス会学校におけるラテン語教育にあわせてイエズス会士らが天草にて出版した本書は、既存のラテン語辞書カレピヌスに日本語訳を加えた体裁をとった大規模なもので、見出しのラテン語に対してポルトガル語訳とローマ字綴りの日本語訳が掲げられる。

「学士院会員しか披見がゆるされない秘笈の書」とされる本書の影印は、言語史や辞書史研究に有用であるのみならず、日本に存在しないものをどのように翻訳し受け入れたかという翻訳史・文化史的にも重要な資料である。（久保薗）

Ⅳ 紙と文学

江戸時代には、各藩が和紙の生産を奨励し、紙の生産量は増大しました。木版印刷による書物が流通するようになり、草双紙などの絵入り本や読本など俗文学の作品が、比較的廉価な紙に印刷されて多くの人々に受け入れられました。一方で上質な紙に、丁寧に写された書物もあります。県大所蔵の『雲がくれ六帖』は「鳥の子紙（とりのこがみ）」と呼ばれる上質な紙に書写されています。

＜展示品解説＞

雲がくれ六帖

江戸初期～中期写　枡形本　六冊
縦 15.8×横 17.9cm　列帖装　鳥の子紙（とりのこがみ）

『源氏物語』五十四帖の補作といわれる作品。光源氏の出家や死など、幻巻と匂宮巻との間の空白を埋める物語が描かれる。もともと「雲隠巻」は、『源氏物語』の古注釈書である『紫明抄』に「廿六くもがくれ雲隠もとよりなし」と書かれているように、源氏の死を物語る巻の意で、名はあっても話のない巻名のみが記されていたもの。本作には、江戸時代に出版された刊本の流布本と写本で伝わる異本とが存在するが、本文には相違がある。本館所蔵本は異本の中でも類本はなく、最善本と思われ、巻末部には、天文のはじめに肥前高来郡に流された督の君が密かに持参していたものを写した、と記される。矢野貫一氏編『雲がくれ六帖』（和泉書院影印叢刊第三期 59、1988）の底本に採用された。（三宅）

万葉和歌集

文化2年（1805）刊　縦 26.2×横 18.8cm　大本　二十巻二十冊　楮紙（ちょし）

本書は文化２年に刊行された『万葉集』で、旁註本の注を削り、元暦校本などの橋本経亮の校異を記し、藤原以文が再校を加えた校異本であるが、宝暦７年（1757）５月９日に本居宣長、享和元年（1801）２月 28 日に安田豊秋、文化 13 年（1816）３月 18 日に河崎清厚といった国学者らが終えた『万葉集』の校合を、久志本常庸が整理して天保５年（1834）７月 12 日までに書き込みを行ったとされる資料である。書物本体への書き入れだけ

でなく貼紙による書き入れもあり、版本でありながらも、〈紙〉を用いた手書きによる『万葉集』の校合という写本の性格も有する。久志本家は外宮の禰宜に任ぜられる度会氏であり、伊勢の文化圏における『万葉集』の学識を伺い知ることができる。（三宅）

南総里見八犬伝

曲亭馬琴作・柳川重信など画　文化11年（1814）～天保13年（1842）刊
半紙本　九輯九十八巻百六冊　縦 22.5×横 15.6cm　袋綴　楮紙

「仁義礼智忠信孝悌」の仁義八行の文字が浮き出る霊玉を持つ八人の犬士たちが、様々な艱難辛苦を乗り越え、因果に導かれながら安房里見家に集結する伝奇小説。『八犬伝』執筆時、馬琴は妻や一人息子の死を経験し、自身も失明したが、失明後は息子宗伯の嫁である路の口述筆記によって書き続け、物語は二十八年かけて完成された。本作は当時から人気を博し、演劇、浮世絵の題材となり、江戸時代の絵本である合巻という形でダイジェスト版も刊行された。本館所蔵本は初版ではなく後刷であるが、この大部の作品が何度も刷り直されることを考えると、江戸時代から明治にかけての商業出版に、大量の〈紙〉が必要不可欠であったことがわかる。（三宅）

偐紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）

柳亭種彦作・歌川国貞画　文政 12 年（1829）～天保 13 年（1842）刊
中本　三十五編七十冊　縦 17.7×横 12.0cm　袋綴　楮紙

展示本は三十五編七十冊であるが、作品自体は三十八編まで刊行。『源氏物語』を翻案した長編合巻で、文政から天保期にかけて流行した。書名の偐紫は「似せ」、あるいは「偽」の紫式部の意、田舎は卑俗の意である。作者種彦は既存の『源氏物語』の梗概書や注釈書を参照しつつ、光源氏は足利光氏、桐壺帝は足利義正、桐壺更衣は花桐というように、『源氏物語』の人物造型や筋をとりながら武家に擬えて物語を描き出した。当時の読者に受け入れられやすいよう、歌舞伎などの要素をとり入れる工夫や、種彦自身の考証癖も見られる。人気を博したものの、天保改革の影響により、多色刷りの華美な装幀の禁止が原因と見られる絶版処分を受けた。そのため、三十九・四十編は草稿があるものの未刊。（三宅）

そでにしきがんりゅうじま
袖錦岸柳島

自怡窟主人編・帰法道人永命画　安政5年(1858)写　半紙本　三巻三冊
縦 23.7×横 15.7cm　袋綴　楮紙

宮本武蔵の武道譚を描いた実録体小説。石川軍東斎、吉岡憲法、佐々木岸柳などの武芸者が登場。武蔵の養子三之助を殺害した岸柳を武蔵が討ち果たす。近世は出版統制によって実名を記した小説は出版できない時代であった。そのため、実録は出版物としてではなく、手書きの写本や講談などの口承文芸で広まった。実録の写本は、基本的に文章を写すものであるが、本書は〈出版されたように見せかけた写本〉であり、その体裁は近世後期に流行した小説ジャンルの読本によく似ている。幕末の中山道大湫宿で本陣や三役を兼ねた保々市郎兵衛と、大湫の文化圏にいた俳人・画人の渡辺原洲の手で制作された。(三宅)

エピローグ
日本の和紙

長い和紙の歴史のなかで、日本の各地に、その地域特有の和紙が生まれました。その実際のサンプルを、直接みなさんの眼で確認してみてください。

＜展示品解説＞

和紙見本帳「日本の手漉き紙」Japanese Handmade Paper

柴崎幸次研究室　編、選

和紙素材の研究において日本各地の和紙工房を廻り、選んだ和紙の製本。現在、８冊の製本があり、本展ではその一部を展示する。

編集と選紙は柴崎が担当し、製本および表紙などの紙の制作は、柴崎、河合友理、愛知県立芸術大学学生が担当した。(柴崎)

解説文は丸山裕美子、展示キャプションは、柴崎幸次、吉池孝一、三宅宏幸、久保薗愛、丸山裕美子が分担執筆しました。